

爪が2本奇麗に分離されて、中間に黄色を見る如く見てゐない點から、第1圖乙の如き形狀を呈してゐた事と思はれる。(甲圖は標準型)

このメリヂヤ1 = 灣から東へ續くサベウス灣は、大した變化も認めず、中央部のシゲウス港も、15極級以上の器械使用の観測者に依つて認められてゐる。

南方へ移つて、1939年の大接近には殆んど消失したかに見受けられたバンド1ラ海峽は、今回の對衝には、稍々濃度を復活して、15極級以上に認められる位の濃度となつたが、これとて、視狀の悪い場合は、25極級にも餘り濃い存在ではなかつた。特に中央部が淡く、兩基部——即ちイヤニウム海に近い側、及びマルガリチ1フェル灣に接する側は、共に濃度は稍々濃い。

上記マルガリチ1フェル灣は、濃い“アリンの爪”に比較すると、随分淡いが、併し、美しい逆圓錐形を示し、前田氏は若葉色、渡邊氏は青綠色と観測してゐる。マルガリチ1フェル灣の先端に近いオキジャ沼は、渡邊氏に依り、十日23日2時の見取圖にスケッチされてゐる。

バンド1ラ海峽の東基部より發して、ヘラス大陸の西側を斜に南下し、ヘレスポンチカ低地に達してゐるヘレスポントス海溝は、渡邊、前田、木邊部長、頼、齋、瀧田、保積及伊達の各観測者に依つて認められており、非常に濃く、美しく南極附近へ斜に延びた様子は、素晴らしいものであつた。そして、その南端に、ヘレスポンチカ低地が相當濃く認められた。

運河 この地區の赤道以北のアエリヤ、アラビヤ、エデンの廣大な範圍に渉る沙漠地方には、ロ1エル、スキヤパレリ、マヂ = 諸氏に依ると、蜘蛛の巣狀の網狀運河が、星形に形成されてゐる地域ではあるが、今回の火星赤道の傾きが北方へ甚しかつたため、この方面の運河は、半調色検出に獨自の視力を有する渡邊氏にも認められなかつた。

南半球に移つて、前記ヘレスポントスとバンド1ラ海峽の間の地域に、2本稍々著しい運河があるが、この中、西方のカルコボロス運河は渡邊氏が検出してゐる。東方のヒルスは誰も認めてゐない。

“アリンの爪”からオキジャ沼へ走る大きくカ1ブしたカンタプラス運河は、淡い乍ら、渡邊氏に依つて描かれてゐる。(つづく)

註——火星表面名稱は、天界217號口畫及圖說天文講座第4卷“遊星”の中の火星圖參照され度し。

天 界 正 誤 表

	誤	正
第252號(昭和17年第6號)		
索引第6頁左欄、日蝕：1941年九月21日	皆既直後の後送	皆既直後の放送
第184頁、標題	ストップ・ナチ	ストップ・ナチ
第253號(昭和17年第7號)		
第227頁第10—11行目	2.5遠鏡は	2.5米望遠鏡は
〃 第11—12行目	強力なものと米望なり	強力なものとなり
第228頁第7行目	時につき徑50の	口徑時につき50倍の